

「専門職を対象とした認知症に関する意識調査」調査結果について

1 調査目的

令和6年1月に施行された「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」により、都道府県・市町村に対し計画策定が努力義務とされたことから、今後の県計画の策定や計画をより充実させたものにするために専門職が認知症に対しどのようなイメージを持っているか把握するために実施する。

2 調査方法等

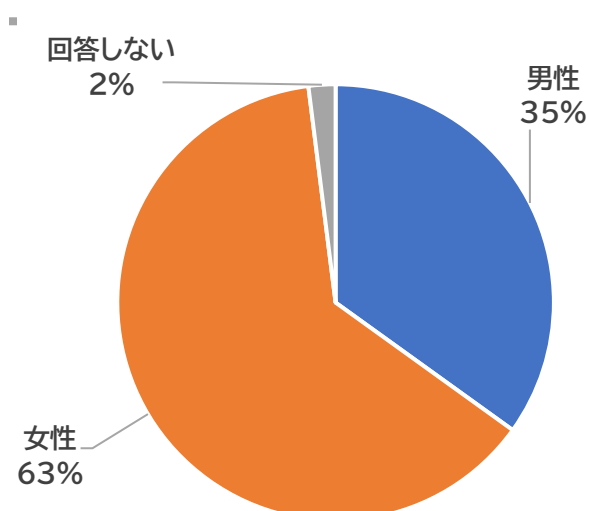
＜Web 式：回答数 501＞

- ・実施期間：令和8年3月19日～6月15日
- ・実施場所：Web 上（LoGo フォーム）

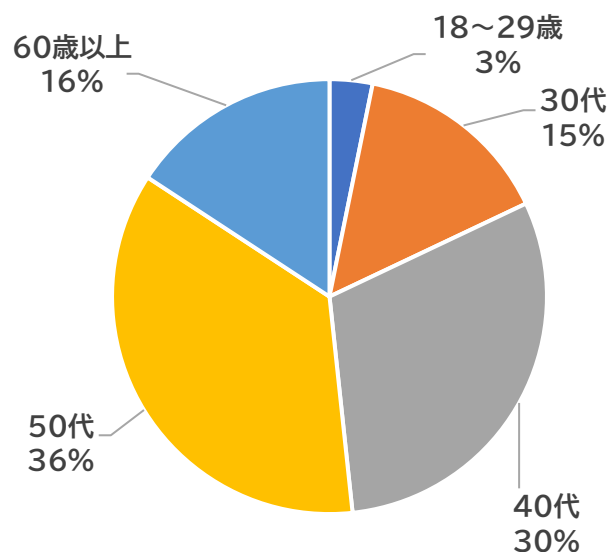
3 調査結果の概要

(1)回答者について

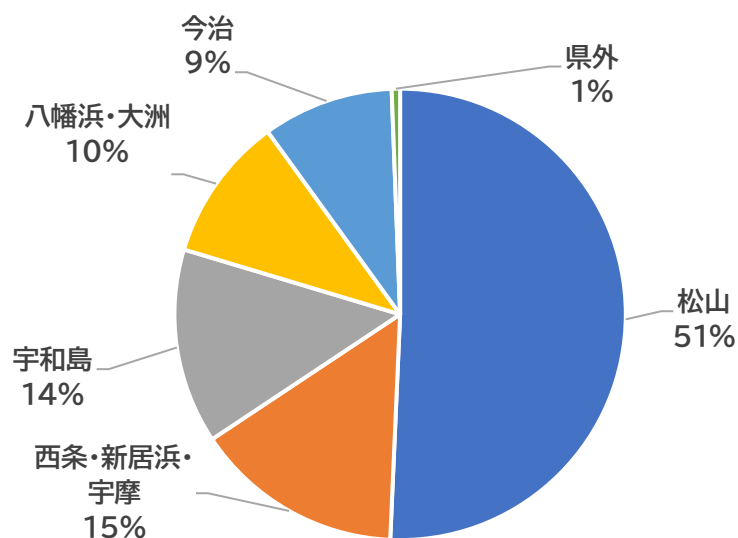
性別



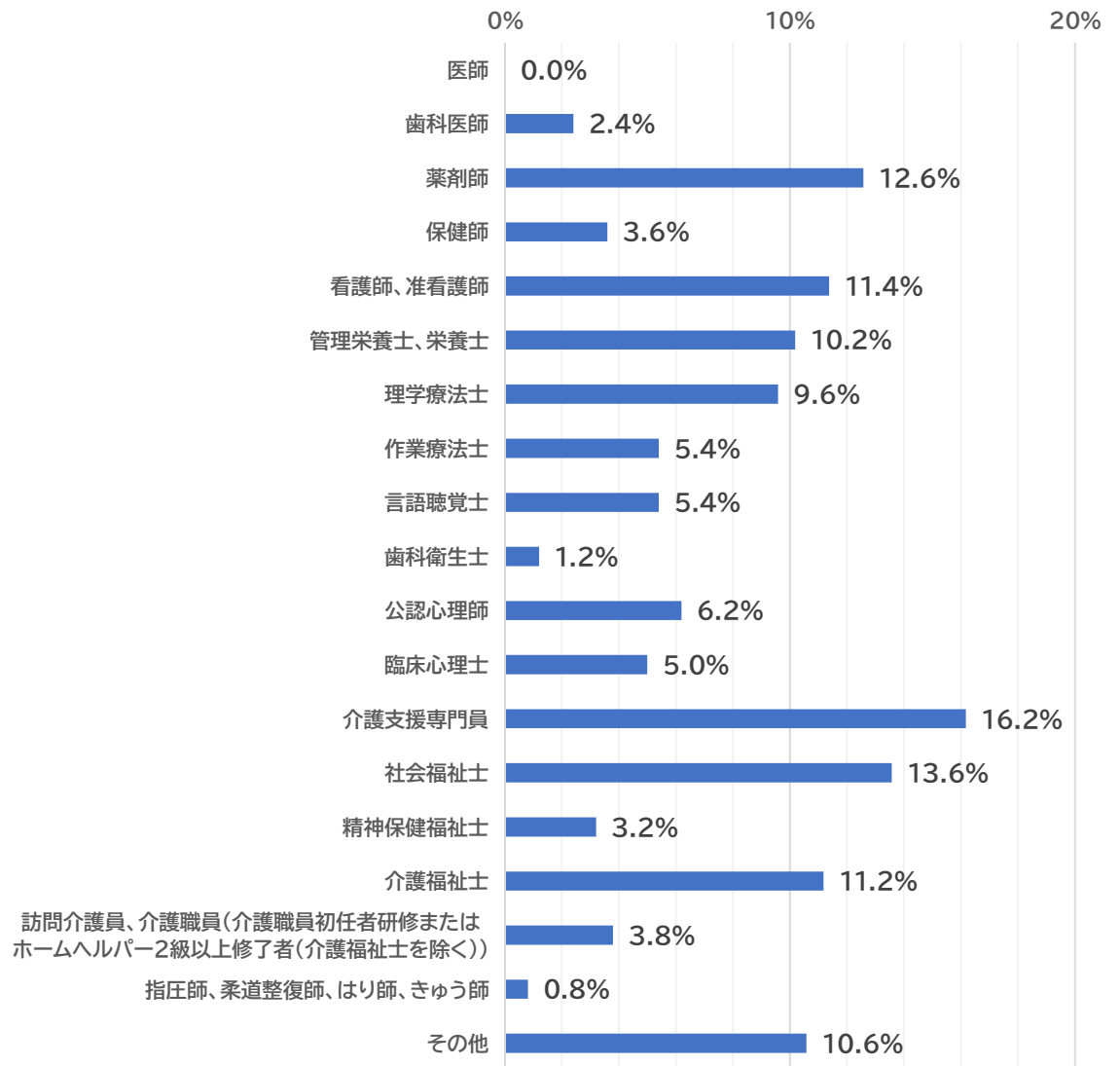
年代



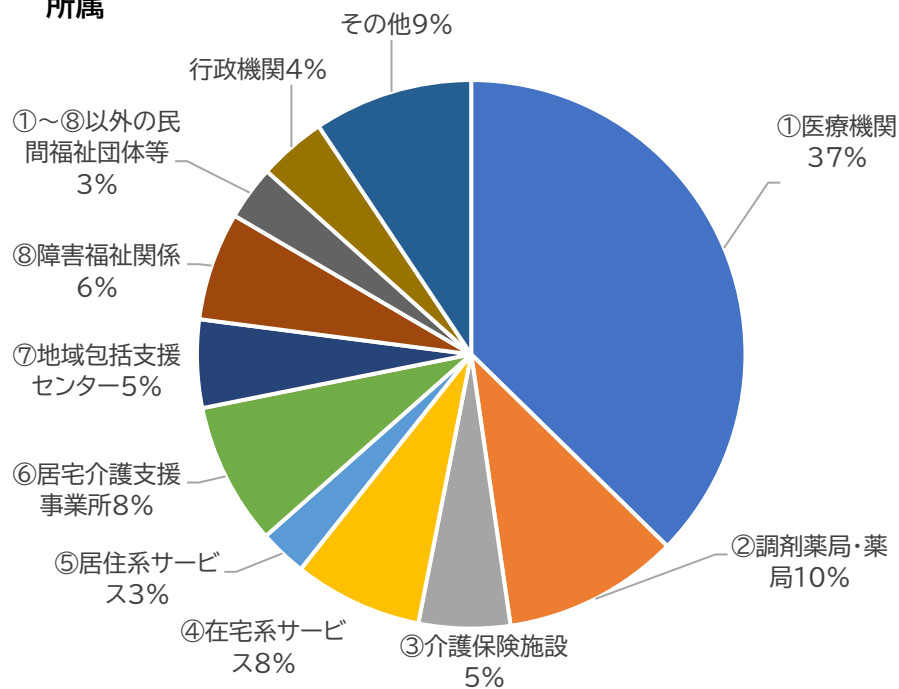
住まい



職種

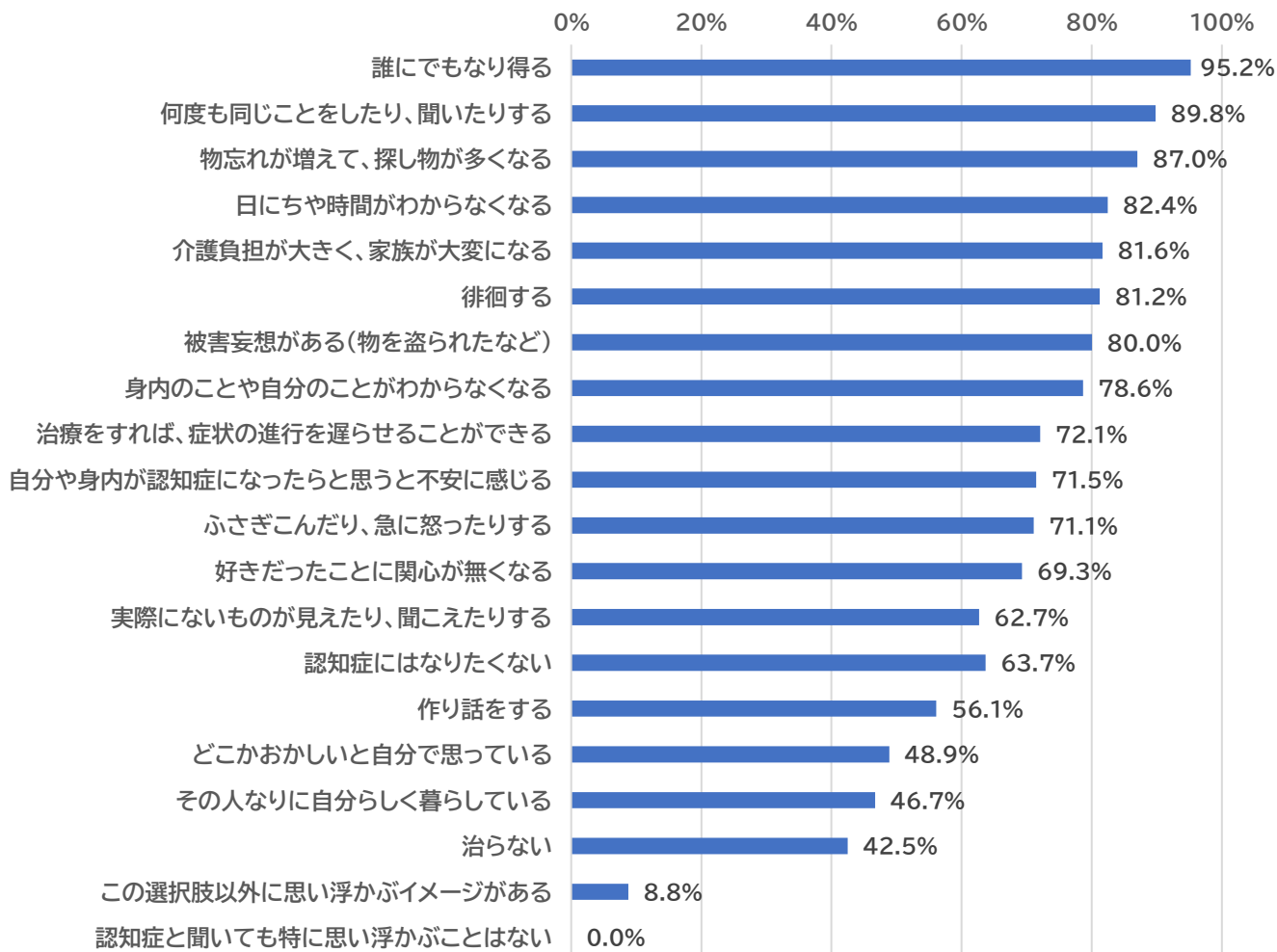


所属



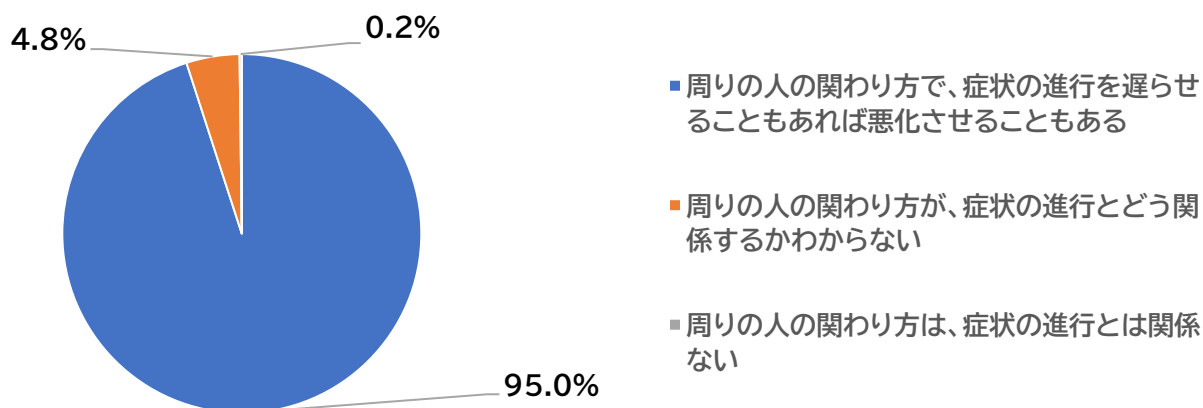
(2)「認知症」と聞いてどのようなことを思い浮かべるか(複数回答)

「誰にでもなり得る (95.2%)」、「何度も同じことをしたり、聞いたりする (89.8%)」、「物忘れが増えて、探し物が多くなる (87.0%)」と回答した人が多い一方、「認知症と聞いても特に思い浮かぶことはない」と回答した人はいなかった。



(3)認知症の人と周りの人との関わり方のイメージについて(単一回答)

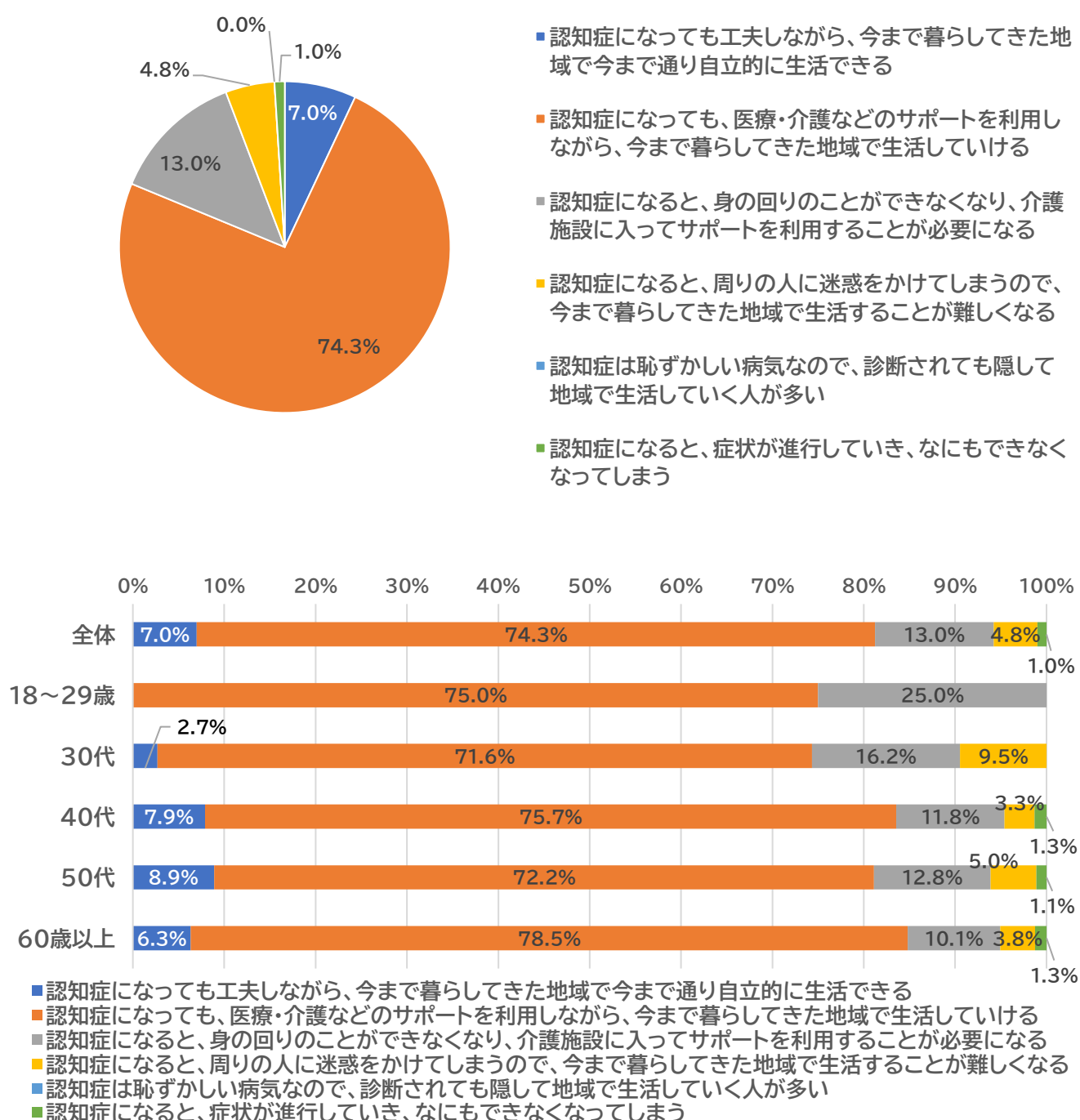
「周りの人の関わり方で、症状の進行を遅らせることもあれば悪化させることもある」と回答した人が 95.0%であった。



(4)認知症の人が日常生活を送るうえでどのようなイメージを持っているか(単一回答)

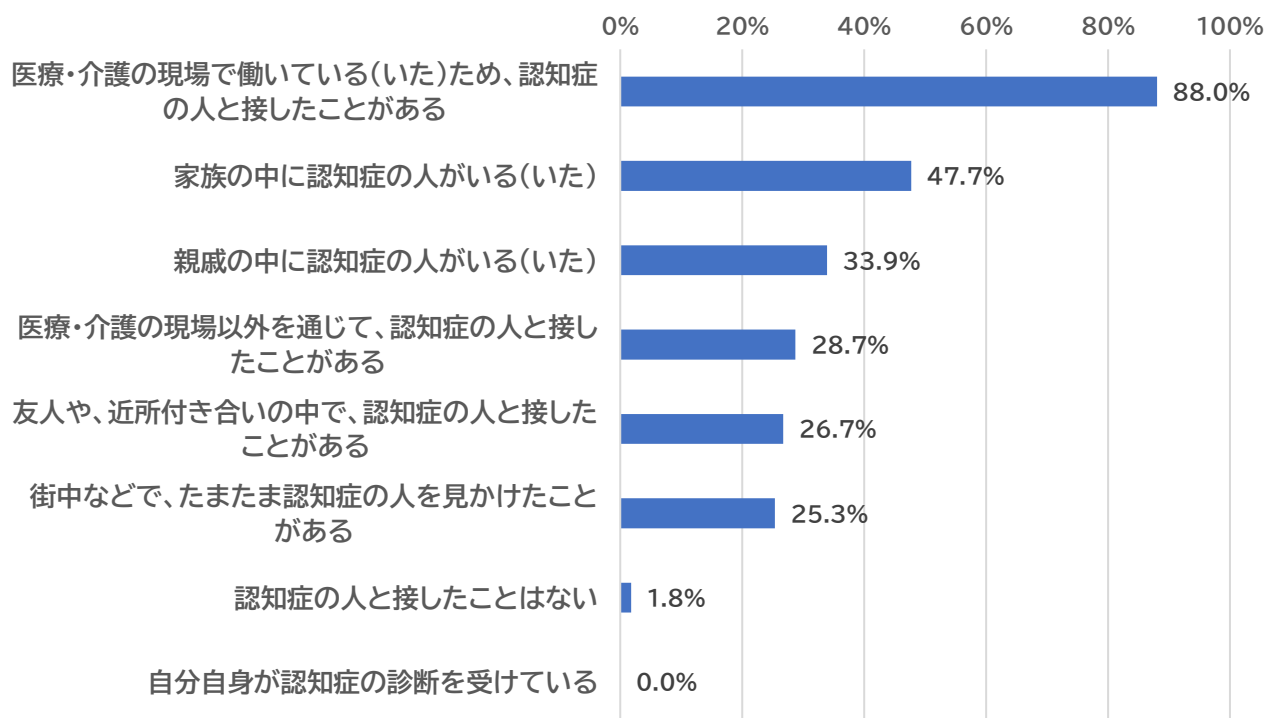
「認知症になると、症状が進行していき、なにもできなくなってしまう」というイメージを持っていると回答した人は 1.0%であった。一方で、「認知症になっても工夫しながら、今まで暮らしてきた地域で今まで通り自立的に生活できる(7.0%)」と「認知症になっても、医療・介護などのサポートを利用しながら、今まで暮らしてきた地域で生活していける(74.3%)」を合わせると 81.3%となった。「認知症は恥ずかしい病気なので、診断されても隠して地域で生活していく人が多い」はいなかった。

年代別にみると、「今まで暮らしてきた地域で生活できる(していける)」イメージと回答した割合は、60歳以上の 84.8%が高く、最低は 30代の 74.3%であった。



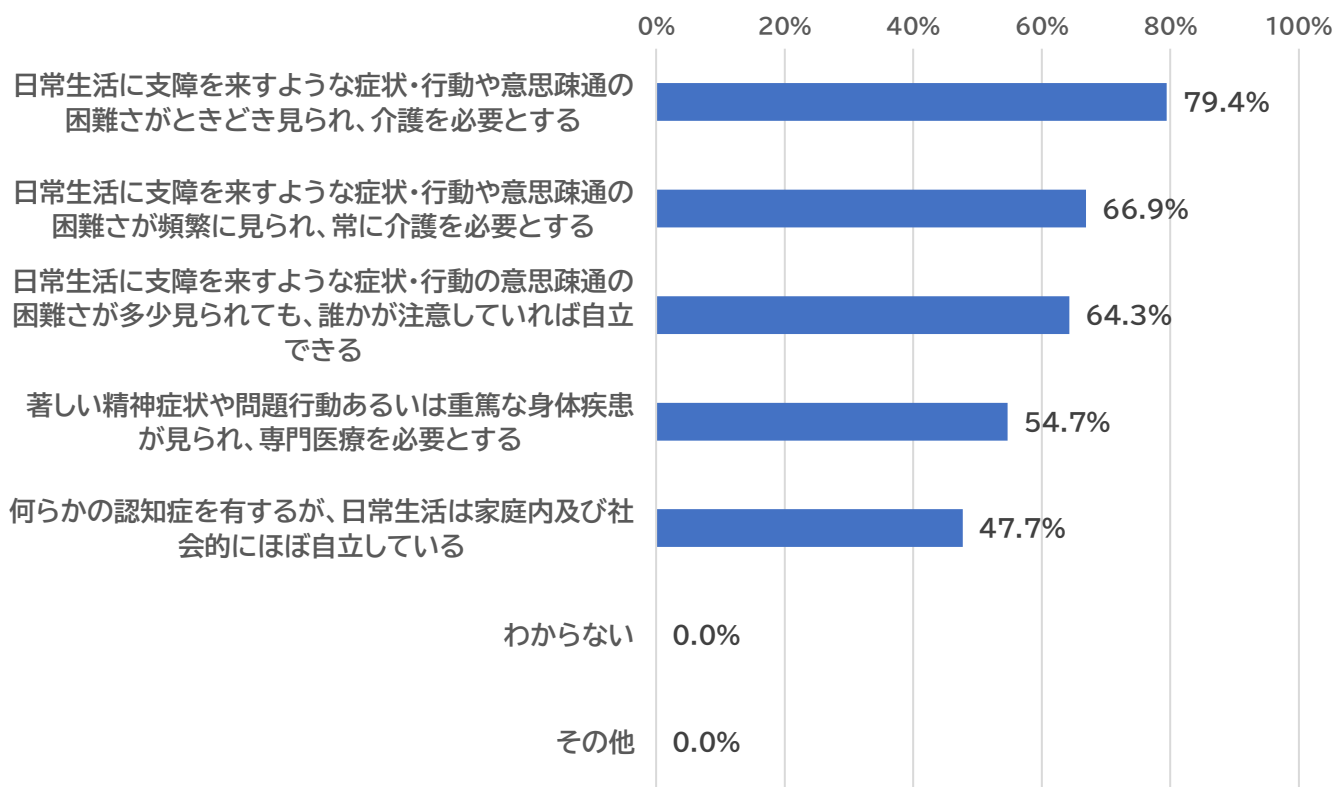
(5) 今までに認知症の人と接したことがあるか(複数回答)

「認知症の人と接したことはない」と回答した人は1.8%であり、全体の9割以上が今までに認知症の人と接した経験があった。



(6) 収入を伴う医療・介護・福祉にかかわる仕事の一環として接したことがある認知症の人の状態像は(複数回答)

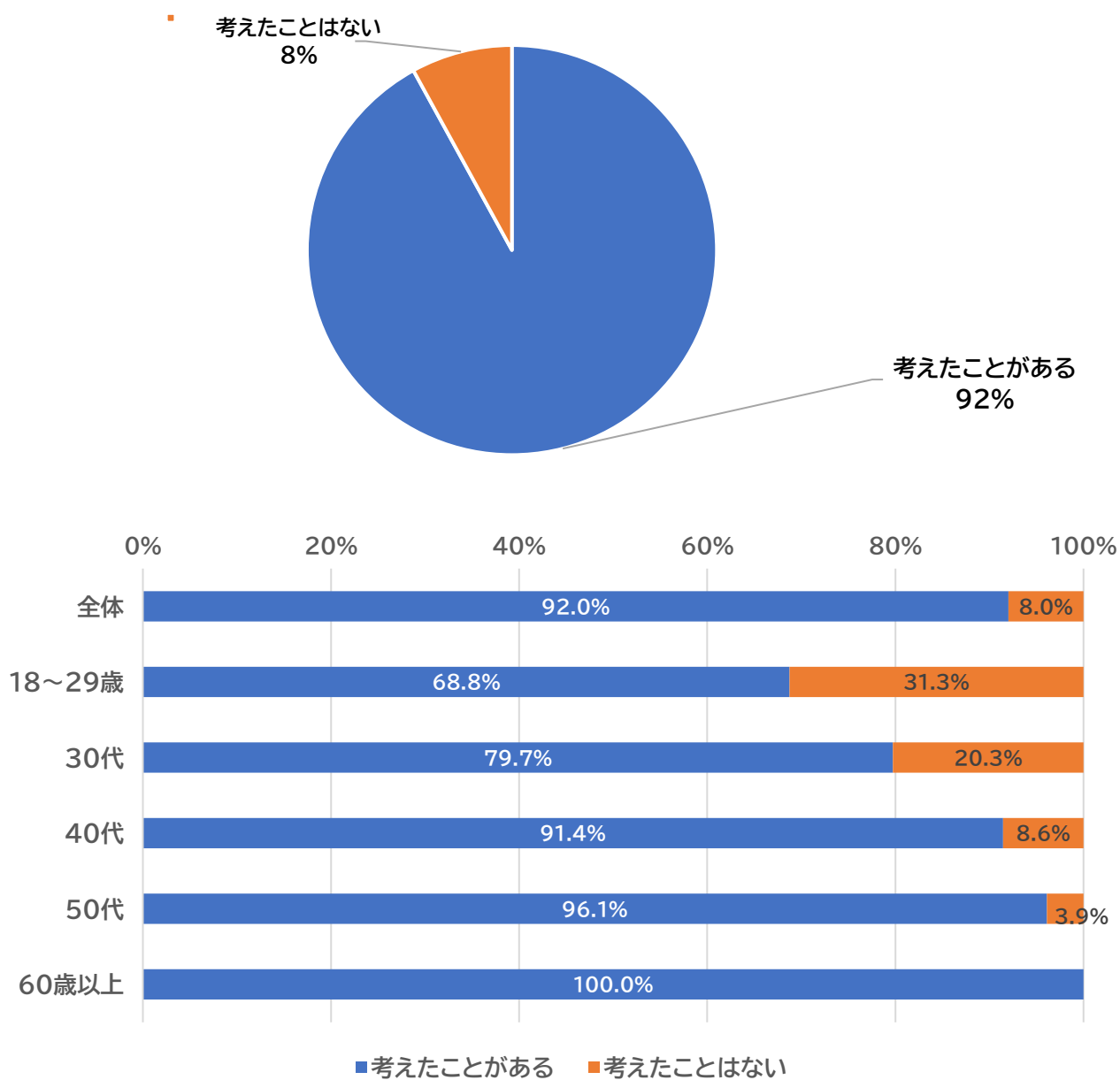
「日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さがときどき見られ、介護を必要とする」と回答した人が一番多く79.4%であった。



(7) 今までに自身や家族が認知症になった時にどうしたらいいのか考えたことがあるか(単一回答)

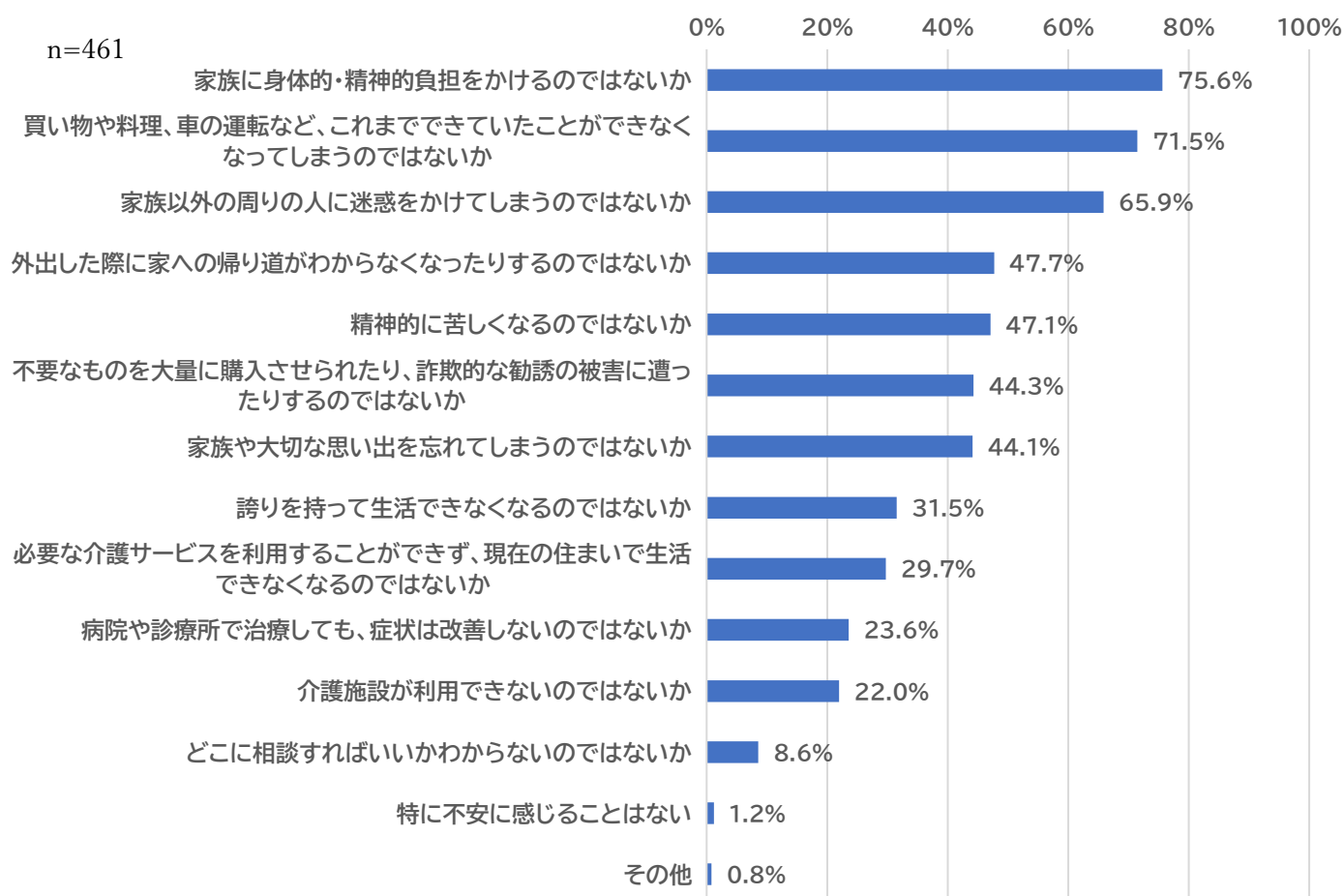
認知症になった時にどうしたらいいのか「考えたことがある」と回答した人は92.0%であった。

年代別にみると、「考えたことがある」と回答した割合は、60歳以上は100%であった。



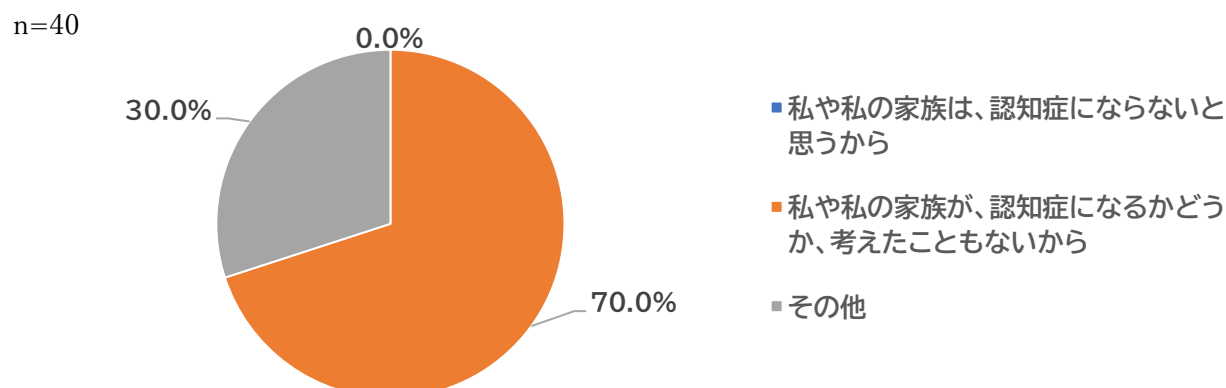
(8)もし、自分や家族が認知症になったら、どのようなことに不安を感じると思うか((7)で考えたことがあると答えた方対象)(複数回答)

「特に不安に感じることはない」と回答した人は1.2%であり、回答した人のほとんどが、何かしらの不安を感じていた。不安に感じることとしては、「家族に身体的・精神的負担をかけてしまうのではないかと(75.6%)」が最も多く、「買い物や料理、車の運転など、これまでできていたことができなくなってしまうのではないかと(71.5%)」が続いた。



(9)自分や家族が認知症になったら考えたことがない理由は何か((7)で考えたことがないと答えた方対象)(単一回答)

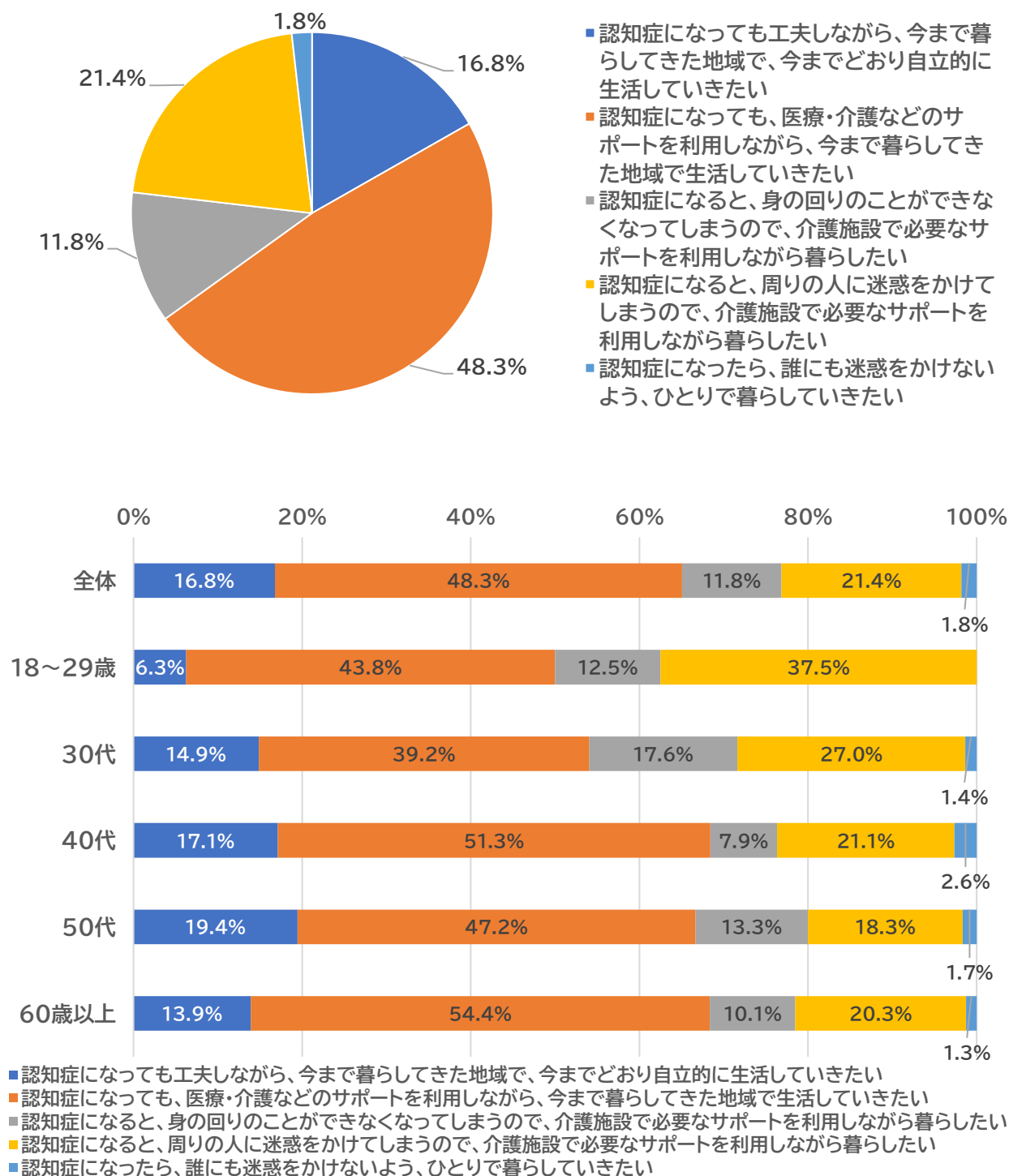
70.0%の人が「私や私の家族が、認知症になるかどうか、考えたこともないから」と回答した。



(10)認知症になったとしたらどのように暮らしていきたいか(単一回答)

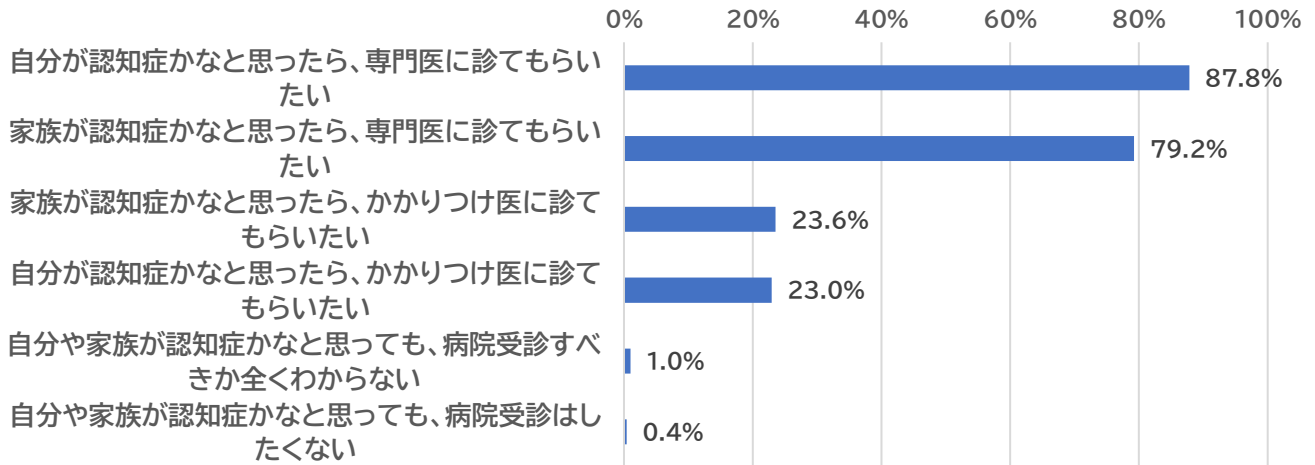
「認知症になっても、医療・介護などのサポートを利用しながら、今まで暮らしてきた地域で生活していきたい」と回答した人が48.3%で一番多く、「誰にも迷惑をかけないように、ひとりで暮らしていきたい」と回答した人は1.8%であった。

年代別にみると、「介護施設で暮らしたい」と回答した割合は、18～29歳（50%）が高かった。



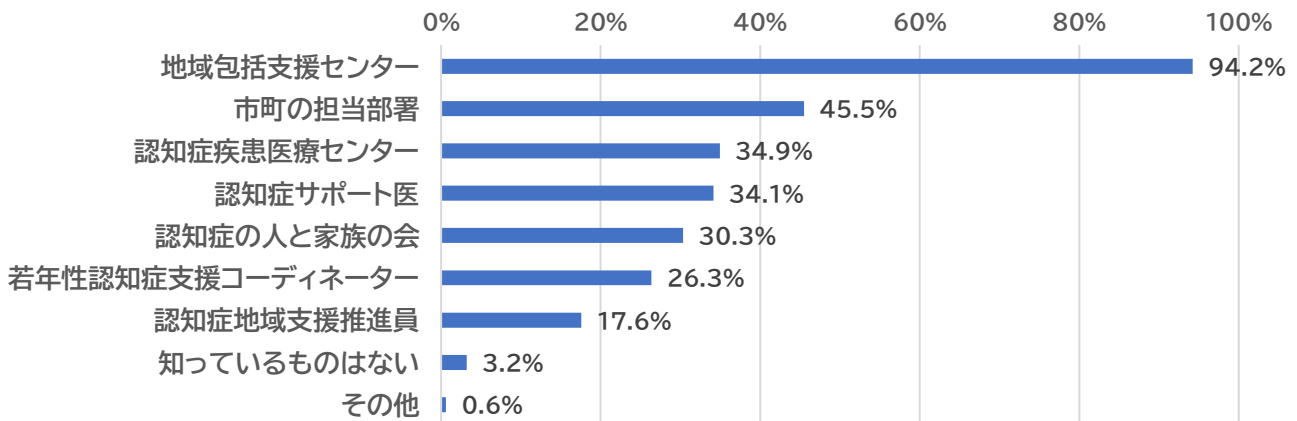
(11) 自身や家族が認知症になったら、病院受診することに関しどう考えるか(複数回答)

「自分が認知症かなと思ったら、専門医に診てもらいたい」と回答した人が 87.8%、「自分が認知症かなと思ったら、かかりつけ医に診てもらいたい」と回答した人が 23.0%であり、家族も含め、かかりつけ医よりも専門医に診てもらいたいと考える人の方が多い結果になった。



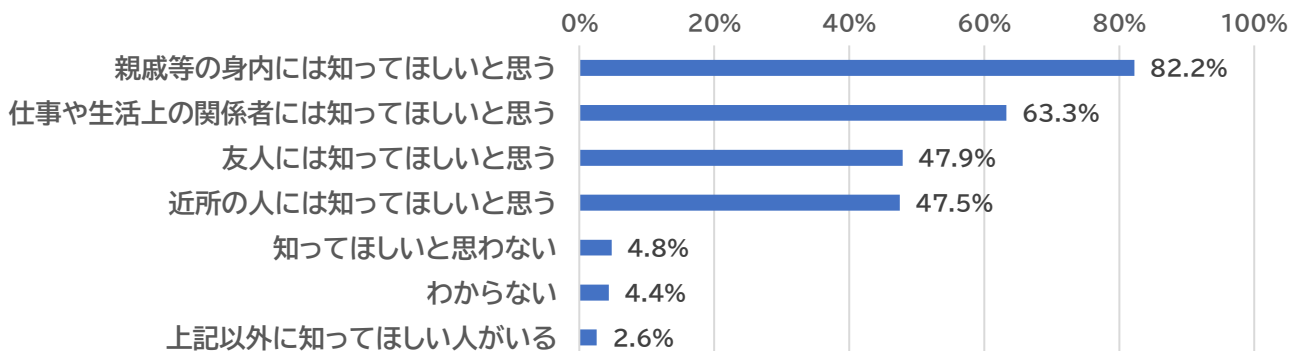
(12) 認知症に関する相談窓口について知っているものはあるか(複数回答)

「地域包括支援センター」を知っているとの回答が 94.2%であった。一方、認知症に関する相談窓口について「知っているものはない」との回答は 3.2%であった。



(13) 自分や家族が認知症になったことを、周りに知ってほしいと思うか(複数回答)

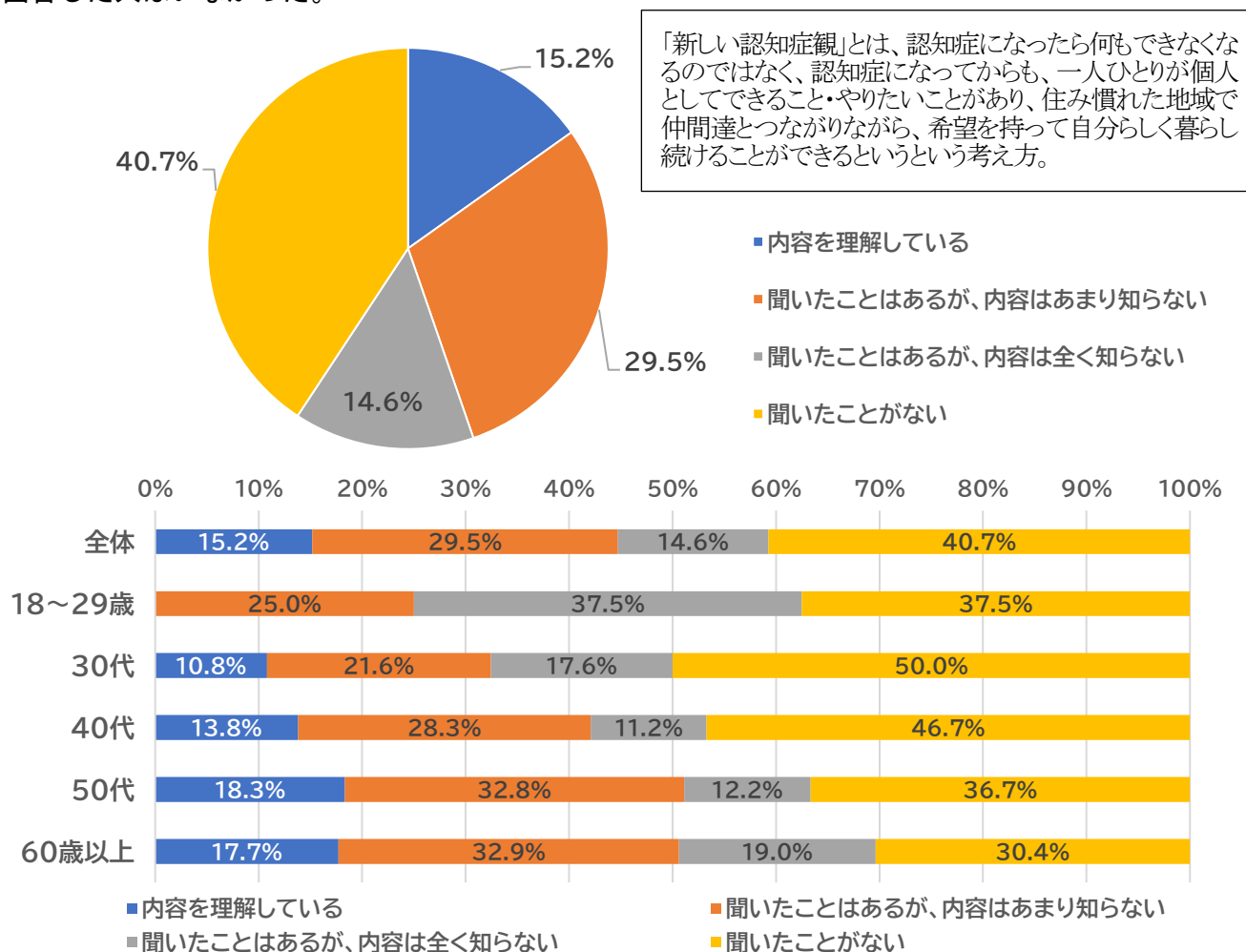
自分や家族が認知症になった場合、「親戚等の身内には知ってほしいと思う」と回答した人は 82.2%であった。その一方で、「知ってほしいと思わない」と回答した人は 4.8%であった。



(14)「新しい認知症観」について知っているか(単一回答)

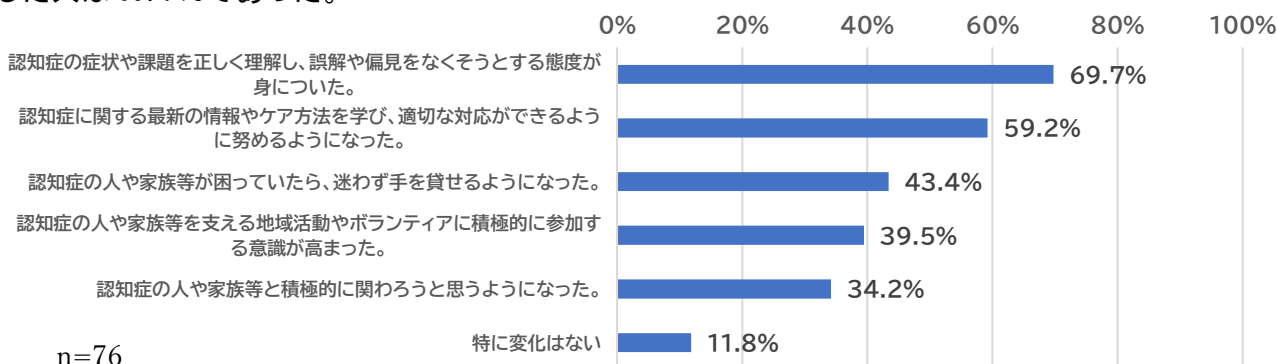
新しい認知症観の認知度は、「内容を理解している(15.2%)」に「聞いたことはあるが、内容はあまり知らない(29.5%)」と「聞いたことはあるが、内容は全く知らない(14.6%)」を合わせても 44.7%にとどまった。

年代別にみると、18～29歳の認知度は62.5%と、全体平均より高いが、「内容を理解している」と回答した人はいなかった。



(15)「新しい認知症観」を理解した後、どのような変化があったか((14)で内容を理解していると答え た方対象)(複数回答)

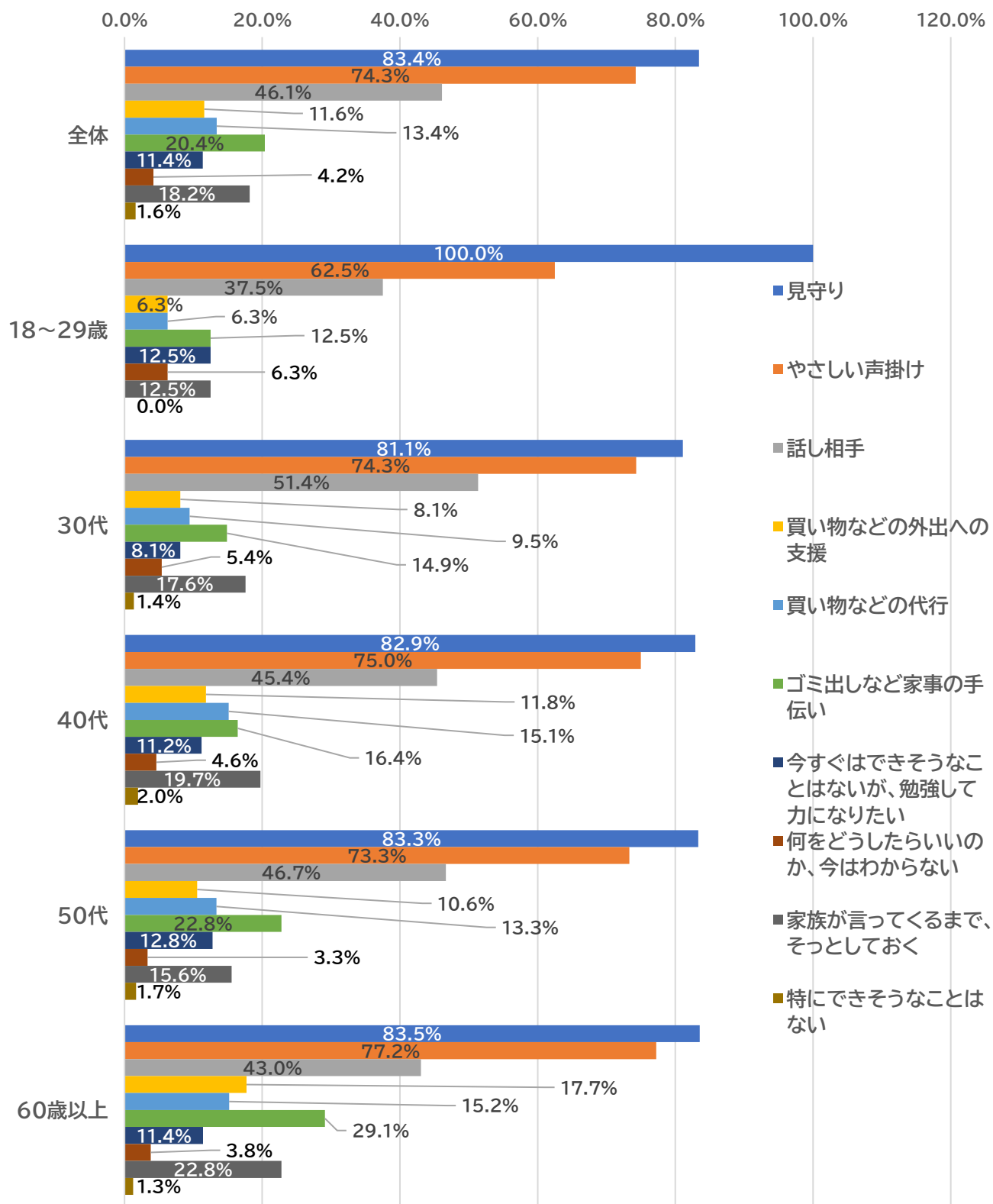
「認知症の症状や課題を正しく理解し、誤解や偏見をなくそうとする態度が身についた」と回答した人は 69.7%であった。



(16)認知症の人が、近所にいた場合、どのような行動ができると思うか(複数回答)

「見守り」が83.4%、「やさしい声掛け」が74.3%という結果になった。「特にできそうなことはない」と回答した人は1.6%であった。

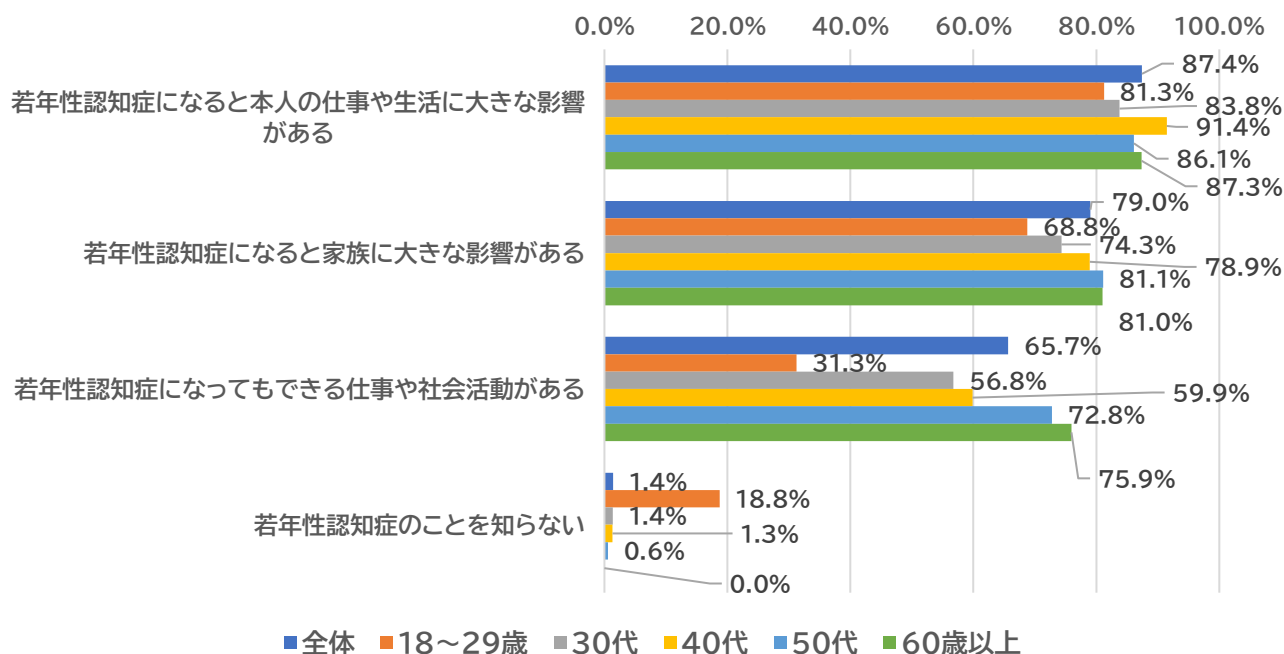
年代別にみると、18～29歳の100%が「見守り」ができると回答した。



(17)若年性認知症について知っていることはどんなことか(複数回答)

「若年性認知症になると本人の仕事や生活に大きな影響がある」と認識している人は87.4%であった。

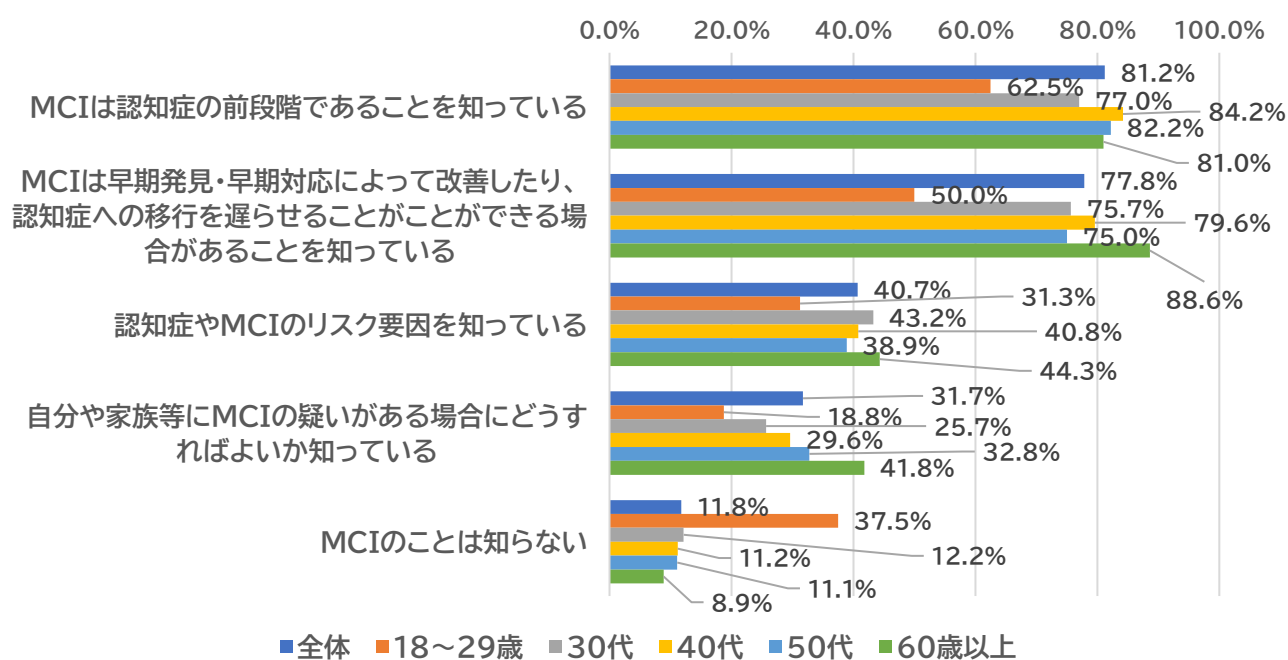
年代別にみると、18～29歳の18.8%が「若年性認知症のことを知らない」と回答し、他の年代より高かった。



(18)MCI(軽度認知障害)について知っていることはどんなことか(複数回答)

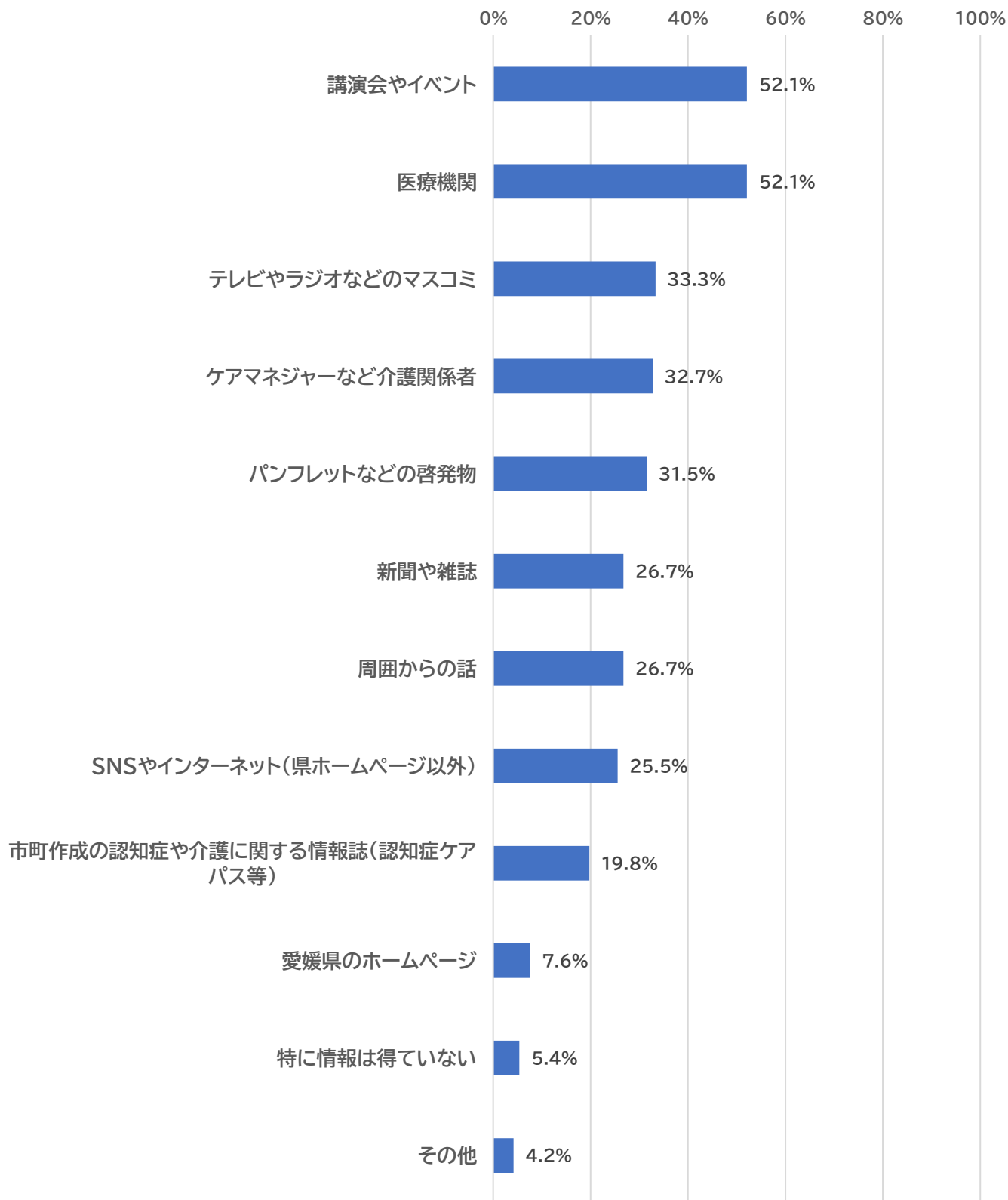
「MCIのことは知らない」と回答した人は11.8%であった。

年代別にみると、18～29歳の37.5%が「MCIのことは知らない」と回答し、他の年代より高かった。



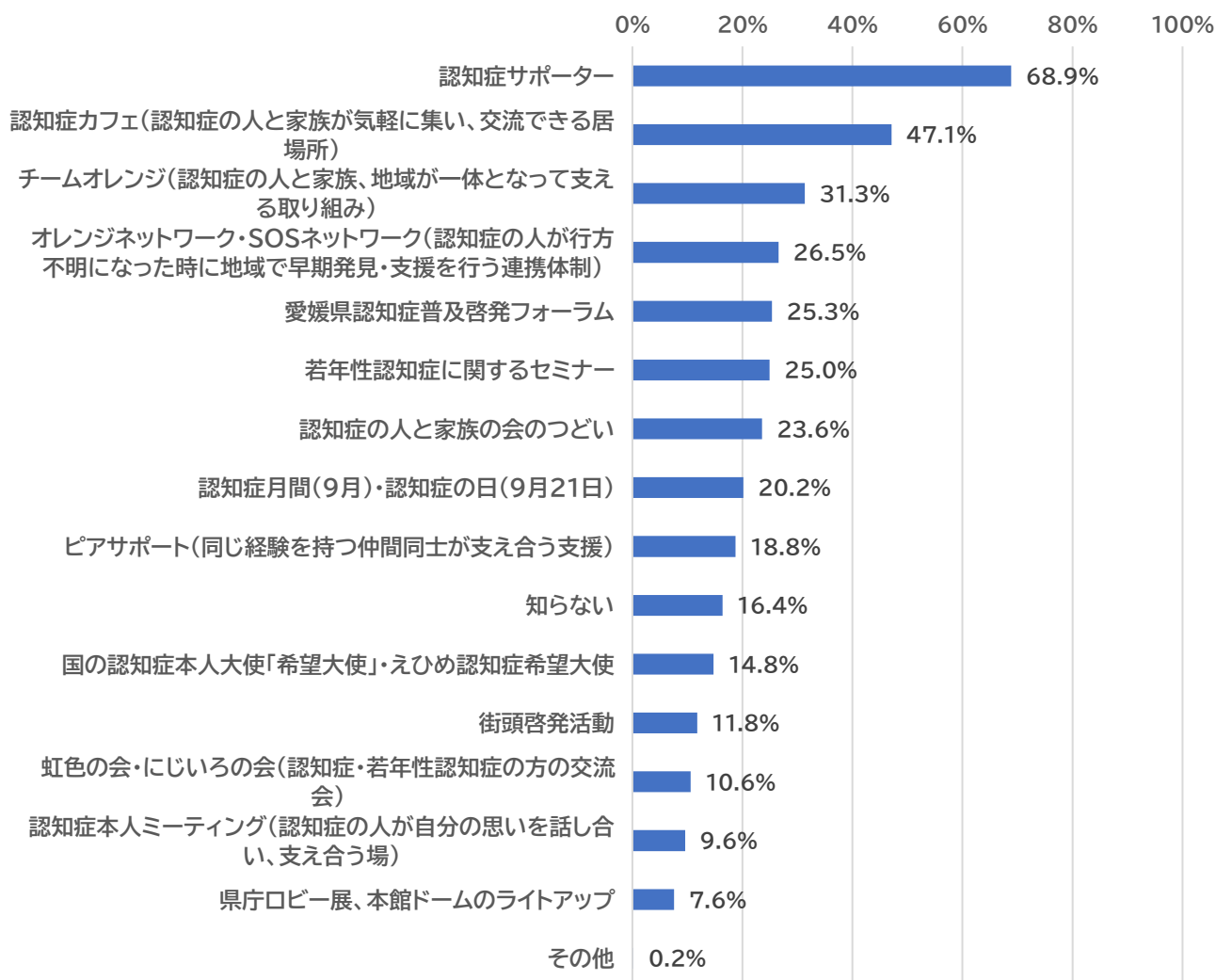
(19)認知症に関する情報を何から得ているか(複数回答)

「特に情報は得ていない」と回答した人が5.4%であり、全体の9割以上は何らかの方法で認知症に関する情報を得ているという結果になった。また、情報の入手手段としては「講演会やイベント(52.1%)」が一番多かった。



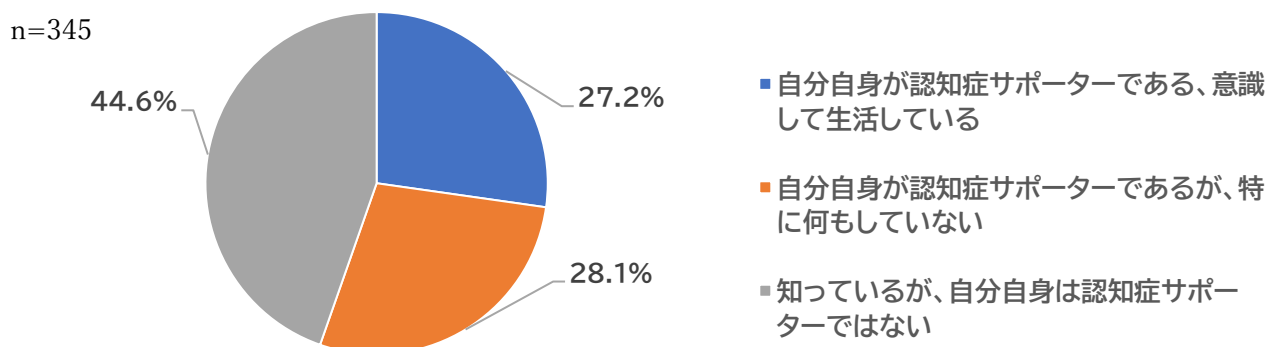
(20)認知症の普及啓発活動で参加したり知っていたりするものはあるか(複数回答)

認知症の普及啓発活動を「知らない」と回答した人は16.4%であった。



(21)19で「認知症サポーター」を知っていると答えた方にお聞きます。「認知症サポーター」を知っていますか(単一回答)

認知症サポーターを「知っているが自分自身は認知症サポーターではない」と回答した人は44.6%、「自分自身が認知症サポーターであり、意識して生活している」と回答した人は27.2%であった。



(22)認知症に関する知識や対応方法を学ぶ機会がありますか。(単一回答)

認知症に関する知識や対応方法を学ぶ機会が「ある」と回答した人は 82.0%であった。

